

転生して1億年生きたらなんか伝説の龍として崇められてるんだけど

辺銀@失踪主

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

爆死して転生し、1億年のんびりライフを送っていた龍「アルガラム」がよく分からん人間達にのんびりライフをぶち壊わされたり、逆になんかやべえ奴らを返り討ちにしたりなどハチャメチャな、謎の異世界転生物語

なお、この作者はヤンヤンマシマシを書かないとしないでしまう病気になる為、怪奇文章が出ることがあります。

できるだけゆったり系のお話を書きますのでぜひ、感想等お願いします！

目次

第1章 龍王と騎士の伝説

プロローグ 1億年生きたらなんか神みたいに崇められてたんだ
けど | 1

第1話 不法侵入から始まる『龍王と騎士の伝説』 | 4

第2話 宅配の事なら、お任せください!!鮮血飛龍(ブラッドワイ
バーン)!! | 9

第1章 龍王と騎士の伝説

プロローグ 1億年生きたらなんか神みたいに崇められてたんだけど

転生とは、死んだあと自身の魂が新たな肉体を得て生き返る事を言うが。

まさか、私がこうやってよく分からん龍になるとは思ってもいなかった()

前世、私はごくごく普通の工業系の仕事に就いて自由に満足した生活を送っていた。

しかし、ある日の事。

作っていた機械が暴走、暴発そして、爆散。

欲に言う爆死した私は、目覚めるとよく分からん自然豊かな世界へと転生していたのだ。

さらに驚いたのは背中には禍々しい羽、鋼鉄の鱗で覆われた肉体、なんでも引き消せれそうな爪。

いかつい牙：そう、異世界でも最強の存在と名高いドラゴンへと転生したのだった。

(いや、それはいいんだけどさ。ワイ：怖くね?)

そりやそうだ、こんな、禍々しいなんかよくわかんねえ翼とか生えてたら怖いに決まってる。

(はあ：仕方ない、空を飛べるかやってみて、無理だったら歩いて周りの場所を見よう)

背中 of 筋肉を動かすイメージで羽を動かしてみる…

あ、飛べたわ()

そこからの行動は早かった、口からよく分からん異様な破壊光線みたいなビーム出したり、ブラックホールのな何かを出したりなど出来ることは知ってたんだが、やはりとんでもない事なんだなど、理解し。禁止事項に変更。

まあ、それでゆったりとのんびりライフを送る為に森のクソでかい

クマとか狩ったりして約1億年たってたんだけど…

(なんかさ、ワイが作ったさ山の下に王国みたいな作ってね？しかもさ、めっちゃ私に似たなんか変な銅像見えるんだけど。)

人間たちがなんか知らんけどアリオステルスとか何とか、この山に名前付けてるし。

てか、この山の名前違うし！真向山まっこうざんやし！はあ…どうなってんだ…てか、暇して作ってた王の冠(小さい奴)とか盗まれたし(まあ…私は被れないから問題無いけど…)

人間の奴ってよくわかんねえなく、あ、元人間のワイが言う事じゃねえか()

さてと…今日も森に…ん？

なんか重武装した人間いるんやけど…

は？何？開拓？何、人の土地荒らしてんねんシバくぞボケええええええええ!!

むかし、むかし、その昔。

世界は人工物もなく、山や、海に…自然に包まれていた頃の事、モンスター達が優々と暮らしていたそう。

そんなモンスター達には絶対的な王が居た。

混星龍 アルガラム と呼ばれた絶対的な王が。

かの龍は、平和が好きであった。森のなかを進めば王の姿を見ようとモンスター達は龍のもとへ集まる。

そんな王は何時ものごとく、森を歩いていた。すると、人間たちに出会ってしまったのだ。

人間たちは、王を見るや否や、その大きな怪物を恐れた。混沌を運び来るその王に。

だが、王は人間の言葉を聞き、その場を離れたと言う。

その龍と人間は仲間たちにその龍のことを話すと。

一人の長老が笑いながら歩いてきた。

「森の王に会うとはなんと幸運な奴じゃのお…」

「森の王？あの化け物が？」

「そうじゃ、あれはこの世界が誕生せしときから居る最強の王、アルガ
ルム。この地を平穏にしてくれたのもあの王のお陰じゃ。」

この世界には、砂漠の世界、火山が噴火せし地や。海にそびえ立つ
地があつた。

そんな過酷な場所の中でも最も安定した場所がこの王の地であつ
た。

いつしか、時が経ち、その人は王となつた。

王は、王に会いに行つた。

アリオステルスと呼ばれしこの地にて1番高い山に住みし龍の王。
その王は、人の王にひとつの冠をさすげた。

世界を平定する器として…

「ねえ！アルガルム様は今も居るのかな？」

青空の下、本を読みし少年が父親にひとつの問いを聞いていた。

「ああ、居るさ。アルガルム様はあの山の何処かに居るさ。」

蒼天の空の下、少年と父親が見えるその大地の向こうに聳え立つ
山、アリオステルスを見ながら少年は思う。

龍の王に会ってみたいと。

その願いが叶うのは遠くないのかもしれない。

その日の空、赤く光る謎の発光体が山の頂上にて見れたと言う。

第1話 不法侵入から始まる『龍王と騎士の伝説』

《とある兵士side》

アスガルド王国の第1王子があのだの伝説の龍 アルガラムが住むと言われる山、アリオステルスに向かうとして我々は、その地へと向かっていた。

私は女だが：英雄や、王などに憧れて騎士になった訳では無いが：あの龍を見てみたいのだ。

アルガラム：それは、王らしい威風堂々とした姿で初代国王に「天鱗の王冠」を与え、王たるものを選定すると言う：

「こんな、でこぼこの地形：一体どうしたらできるの？」

山は、凹凸が凄く、針のような山が幾度ともある：

空は黒く禍々しい：なんだ：悪い予感がする：

「分からないが古代の文章ではこの場所はまだ緑豊かだったらしい。しかしアルガラムの逆鱗に触れた人間がいて、アルガラムが暴走した結果この地が生まれたと言う：しかし：ここまでの地形は：」

隣にいた考古学者らしき人間がそう言うが興味はない：

「よし、皆の者。ここで一旦休みにしようか」

だいぶ開けた場所に来たが：なんだろう：この場所：

少し雰囲気が違う気がする：

そう思い、他の部隊がテントを建て始めたのであった。

私は他の部隊と少し離れて、回りを見ることにした。

そこには大きな獣が地面をえぐり抜いた様な場所が：

(もしかして：：ここが)

そう思った矢先、いきなり後方に居た部隊が赤い光と共に消え去った：

すると、ドスン、ドスンと黒煙の中からその王の姿が現れた。

『GUUUUUuuuuuu...』

その禍々しいオーラに騎士達は飲み込まれ一人、一人と倒れていく。

見るだけで魂を吸いとる様に...

でも、私は…

(綺麗…)

その姿を見たくて、この場に来た。
そして、今ここにその存在がいる。

…
禍々しくも神々しいその姿に、私は惚れてしまったのかもしれない

一方、アルガラムは…

なんやワレエ!!ワイの山に変なもん作りやがつてえ!!

(※テントを建てただけです)

口から小威力のフレアを吐き… って、ええ… ?

影だけ残して消えてるんやけど… ?

なにその、高威力ブレス… 『マ○ヤドではない、ヒ○ドだ』とか某
大魔王さまの名言使えるやん。

ん?

「綺麗…」

…

なんか頭が可笑しい子居るんやけど。

ワイのこと綺麗とか思ってるイカれた奴いない?

てか、ワイにめちやくちや近づいて来るやん。

ちよっ、待て! stop! 剣置いてくれるのはわかる! でも、殺し
たくないんよ! stop!! あっ。

…何も起きてない…だと? 珍しくワイの「自己防衛」のスキルが発
動しなかったんやけど…

ん? 待って? なんかこの子、ワイの前に膝ついてるんやけど。

って、ちよっとまって? なに? ロングソード地面に刺して

「アルガラム様… 我らの神々よ… どうか、私を連れてつてくださ
い!!」

あかん… 脳内がこの子逝ってるやん…

そんなことがあり、いつの間にかワイの家に新たな住人が増えまし

たく…：… って、そう言う事じゃないんよ。

『まふていー！まふていー！』

(やめなさい、某カボチャの被った人の名前を言うのは)

ワイの家、小さな洞窟の奥にある神秘的な木。

そこにはワイと、『コダマト』と呼ばれた不思議な精霊が居た。共通点は身長は約2cm程度って事と、頭から下は、白いタイトの様な物を着ている。

1匹1匹、顔が違っており、こいつは、カボチャの顔をしている。

この精霊はワイが住み着いた所のみ現れるらしく、引越する度に彼らは着いてきていた。

彼らは、ワイの脳内の記憶の一部を持っており、様々な単語で喋る事が多い。

『ふあー！ふあー！』

「これが…アルガルの住処…」

コダマトは今となっては約1億匹もの数が居る。

独自の考えを持ち、独自の文化を発展させる。

それが彼ら。だからこそ、ワイの住処であるこの天上から日が差すこの地には、ワイがよく寝てるベッド(藁のベッド)と、包み込むような岩の壁に、コダマト達が掘り進んで開拓した街が出来ている。

『やってみせたよ！まふていー！』

『なんともなるはずさー！』

『ガ○ダムだとおー！』

(だからやめなさいって)

こいつらが居ると中々に暇にならない。

ワイが王様としたら彼らは市民だ。

様々な言葉で喋る事が多いが…それでも意味を知り、言葉で文化を作り上げている。

「アルガム様、あの…」

(なに？あー、なんか付いていくとか何とか…まあええわ。この剣あげるンゴ。)

コダマト達にワイの作った剣の1つを出させて、それを彼女の前に

運ばさせる。

ワイがなんか暇だから作った10本の「選定の剣」の1つ、ワイの1番最初の作品「魔ヶ絶つ強さを約束されし剣」

アーサー王伝説に登場する伝説の武器「エクスカリバー」その改良品の一つ。変な湖の精霊になんか貰ったら剣がそれがエクスカリバーだったのでワイの能力で10本に複製したあと、能力の一つ『真つ暗の渦』の力を得た剣。見た目は神々しいけど…どこか禍々しいオーラを放っている。

「!?…これを私に…?」

(Yes、Yes)

ワイは首を縦に振るとコダマトの中でメガネをつけたやつを呼ぶ。彼は『翻訳のコダマト』、その名の通りワイが言ったことをちやんと翻訳してくれるのだ。

あ、ちなみにワイは日本語喋ってるけど1億年たってもあっちの言葉は言えません、分かるけど。無理。

だってワイ声帯無いから唸るぐらいしかできへんもん。だから、コイツらに指令してやる必要がある。

『ぬーし、きみ、名前、きいてるー!』

そうコダマトが言うのと被っていた鋼鉄のヘルメットを取る。

白銀の長い髪、綺麗なラピスラズリのような綺麗な目。

ふつくしい…

「わ… 私はーシア… 『シア・デイスゲード』です!」

『ぬーし、いい、名前、してるって、言ってるー!』

シアか… 本当にいい名前だ。

さて、問題のこの剣をシアに『統合化』させなきゃいけない。

リンクすれば、他の人間はコイツを触ることも出来ない上に、もし無くなっても名を呼べば必ず自身の手元に戻ってくるのだ。

『ぬーし、剣、持ってる。選定、儀式、するって。』

シアが剣を持つと光の粒子がこの洞窟内に舞う。

持っていた手にワイとの契約を含めた『混聖の紋章』を浮かび上がらせて行く。

彼女がゆったりと目を開ける、剣とリンクしたシアの右目が紅く染め上がっていた。

「シア・デイスゲード… 私は、今日を踏まえアルガラム様にお仕えいたします…!!」

その日、未来にて「龍姫王」と呼ばれる少女と、王の名を持つ最強の龍が契約^{コンピ}を果たした。
で…

『ぬーし、外の、騎士、どうする?』

「あつ…」

第2話 宅配の事なら、お任せください!!鮮血飛龍 (ブラッドワイバーン)!!

洞窟内では、小さな迷彩柄のヘルメットと、迷彩柄の服を着て、手元には銃を握った約7000匹ものムキムキなコダマトが並んでいた。

(第1コダマト大隊に告ぐ、王都へ向かうぞ!!!)

オッス、おらアルガム。

謎の手順でシアちゃんと契約して、気絶してしまった騎士達を運ぶため

コダマト達にコダマトを運ぶための馬車ならぬ…龍車を制作してもらった。

立方体の謎の鋼鉄の箱で、中には、クッションの代わりにコダマト新聞製作所から出てくる紙のゴミを編んだ物を入れている。

これを四台、一つ約8人運べる計算だ。それを、専用のサドルに龍に付けて飛ばせば、浮くって訳だ

「アルガム様、全員を馬…車…?に詰め終わりました。」

よし、ならば。

《俺達の出番って事ですな、アルガム様》

実は、この山。ワイバーン達の中でも一番上の存在、鮮血飛龍達の住みかでもある。

ワイがこの山を作り上げた際、ワイの命令に聞く代わりにここを住みかとしてもよいと言う協定を約…何千年前にして、それ以降こうやって何かあればたまに呼んでいる。まあ、契約まだ色々あるけど。

そして、ブラッドワイバーン四体とワイ、シア、コダマト達約7000匹を連れていざ王都へ

(そゆこと、じゃ、頼むわ。)

《これより、王都へ緊急搬送を開始。コダマトは直ちに我らの上に乗るがよい。》

『やまとだまししいをみせてやる!』

『やってやる... やってやるぞおお!!』

『パワー』

さて、俺達は。

『ぬーし、シア、ワイの、背中乗れって!』

「え? いや... 無理です... あ、いや、神に等しき主、偉大なるアルガ
ルム様の背中に乗るなんて、私が王都へ行った時に皆から叩かれて殺
されますって!!」

あつ、そゆこと? いや、てつきり臭いから乗りたくないとかそんな
意味合いだったら、ワイの不死身の豆腐メンタルに突き刺さった
で...

『ぬーし、大丈夫、乗って、だつて!』

「な、なら... お言葉に甘えて...」

渋々と、ワイの背中に股がるシア。

禍々しい6つの翼を広げ、空へ舞い上がる。

黒き雲にその身を突っ込み、ブラッドワイバーン達と行く。

この日、王は空へ駆け巡る。

山の下、王たる物が生まれし故郷の村、「サクソン村」では。

二人の赤き幼き少年と蒼き幼き少女が広々とした野原を駆け巡っ
ていた。

「待つてよーアリスー!」

「遅いよ!!イオ早く早く!!」

村の少し離れたこのブロー平野には、異世界であるあるのスライム
や「アルミランジ」と呼ばれる某有名RPGに出てくるウサギでは無
く、少し小さいカエルが飛んでいる。

無邪気な彼らはどうやら水を運んでいるようだ。

「母さん!!帰ったよ!!」

「あら、お帰りなさい。大丈夫だった?」

「うん!!」

母親に何とか水を渡すと、村に住む男が「大変だ!! 大変だ!!」と声

をあらげていた。

それを聞いた近隣の人や、老いた老人が出てきたのだ。

「アルガルム様が空を飛んで、王都へ向かってるってよ!!」

「アルガルム様が!? そりゃ、本当なのかい!？」

大人しき混聖龍アルガルムが朱と蒼き雷電を纏って空へ飛んでいくと。

近隣の村から村へ、魔法を通して通じて居たのだ。

それを聞いて空を見上げる幼き二人。

「あ!! アルガルム様!!」「アルガルム様だ!!」

それを聞いた大人達が幼き二人の子供が指差す方向に目を向けた。

雲にかかつて余り見えないが、6つの翼を開き、本当に朱と蒼き雷電を纏って空を飛んでいた。

それを見た村の人々は大混乱。

神に等しき存在、本来飛ぶはずも無いのに空へ舞い上がって怒りを顕として王都へ向かっているのだ。

そりゃ、混乱するわな()

そんな事を目にくれず、聞こえない声に耳も傾ける事もなく優雅に空を泳ぐアルガルムと

落ちそうで少し怖がっているシア。

その、優雅な時間は過ぎ、雲を越えると王都が見えたのだ。

王都:.. アルガステル。山と山の間に来た難行不落の要塞。

もし、そこに神に等しき龍が、この王都で信仰する龍がこの地に降りたら？

答えは..

「GUUUUUuuuuuu...」

「と、言うわけで、団長。お世話になりました。」

「ええ...」

王都へ降り立ったアルガルム、天空の空にて降り立った龍を見た市民、兵士全てが龍の前に膝をついた。

王もそれを聞き、直ぐ様に移動。王と龍王が対面する形となり、翻

訳のコダマトがこれまでの事を報告。

それに対して王は生まれながらの強者で有りながらも、神に等しき龍に頭を付ける事になった。

一方の、シアに関して王国騎士団の団長にこれまでの説明をし、何があつたのかと言う事。

周りの団員達が驚愕、団長に関しては頭を悩ませ、大混乱を産んだ。結局の所、シアはアルガラムに着いていく事を決め、コダマト達とニコニコしていた。

ちなみにだが、とある団員がコダマトを嘲笑い、怒りに触れ、団員が全員ムキムキのコダマトにフルボッコにされたと言う。

恐るべし筋肉パワー、飛び散る汗、そうコマ○ドー（違う）

こうして、王に兵士達を送る事もでき、命を奪ってしまった者へ黙祷を捧げ、終わったのであった。

てかさ・・・

『ぬーし、結局、なに、しに、きたの？』

「・・・まあ、どうでもいいことなんで気にしなくても大丈夫ですよ、主様。」

『???』(???)

その頃、王都の教会にて・・・

龍を象った銅像に膝をつき、祈りを捧げる金髪の修道服を着た女が居た。

シスターでありながら、その溢れんばかりの豊満な胸と見るだけで分かる美顔。

王都にてこのアルガラムを崇める「ドラグニティ」の中では彼女の事を知らない者は居ない。

「嗚呼・・・／／アルガラム様が降臨したのですね・・・／／／」

姪妖な笑みを浮かべる彼女・・・

そして、アルガルムが統治する森の中にて。

コツコツと何かが煮る音と共に鼻唄が聞こえてくる。

「アルガルム様… アルガルム様… アルガルム様…」

人言えば、アルガルムが統治する森の奥に六人の大魔女の一人が居ると言われる噂がたった事があつた。

その魔女はアルガルムを狂気に満ちたほど愛し、精神状態がイカれているとか…

その噂は本当かどうか分からない。

もし、この噂が本当なのであれば… それはそれで恐ろしい…

まだ、アルガルムがのんびりライフを手に入れるのはまだまだ先かもしれない。